

事經濟が出来ようと思存します。勞働は神聖と申しますから、今後の日本婦人たる者は、身分の如何、財産の有無を問はず、手内職をなされたいものであります。

現代の婦人と其の責任

世界の大戰亂と平素の準備

世界の大戰亂は、餘儀なく我が國を起たしめ、始めて獨逸を敵として戦ひました。幸に其の東洋の根據地である青島は陥れ、南洋の壹部は占領しましたが、跡始末は、果して、どうなりませう。戦争には勝つても、之が結末を收むることは、容易なことではありますまい。それは日本は、貧乏國であつて、平素の準備の十分でない所はないかと思はれます。英國と同盟して居ても、露國の後援はしても、平等なる利益を收むることは、負債國たる我が國では、如何かと思はれます。併し六千萬の國民中、三千萬は婦人であるから、婦人さへ確りして居たら、外債を償却する

に、左迄の困難を感じないでありませう。従つて他の方面にも、種々國力の充實を計ることが出来ようと思ひます。獨逸は眞に強い、敵ながら天晴である、長日月に亘つて、未だ敵兵を本國中に入れないと云ふのは、實に平素の準備が良い爲でありませう。

婦人の責任と育児

今後日本婦人の責任は、一層重きを加へます。うかくして居てはならぬ云つても、嘗に存じて居る計りではいけません、眞に相警めて、列強の婦人に恥ぢない立派な行爲をせねはなりません。殊に、より秀でたる第二の國民を養成することが婦人の大なる責任であると云ふことが分つたなら、精神も身體も健全屈強な、子供を作りたいたいものであります。例へば、細いことこのやうであります、やれ寒い、衾巻をさせる、熱いから避暑をさせる、厚着をしないと風邪を引く、今年の流行は、どうであらうと、そんなことばかりに心を費して居ては面白くありません。世界の

大戦亂は、思ふに、何れは獨逸の敗北に歸するかは存じませんが、未だ俄に、どう云ふ結果を得るか分りませぬ。假令獨逸は閉口しても、それ以上の大敵に遭ふかも知れませぬ、こゝに着眼せねばなるまいと思ひます。

今の婦人ご國産奨勵

私は思ふに、少くとも日本婦人の過半は、金の貴いことを知らんではあるまいかと思ひます。一家の爲に、一國の爲に勤勞して、金を拵へると云ふことに迂いかと思はれます。而して子供には甘い、寛に過ぎはせぬかと思はれます。子供が虚榮虚飾に奔つても、又無駄な費用を致しても、今の時節だから仕方あるまいと思ふやうでは、いけまいと思ひます。外國品を用ゐることを一種の誇りとし、和製を卑むことは、實に宜しくありません。嚮に、宮中に於かせられて、外國品を用ゐぬやうにされたので、民間でも大分眼を醒して來つゝあるのは、實に嬉しいことであります。が、さりとして髮迄も、束髪では駄目である、丸鬘か島田でない面白くないと云つ

て、態々束髪を丸鬘か島田に結びかへる、今迄は、簡單な髪で、鬘型も入らなければ、中ざし、櫛、笄、珊瑚樹も入らなかつたのが、俄に種々の手數と裝飾を要するやうになつたと云ふのは、果して如何でありませう。今迄は恐れ多くも、皇后陛下に御謁見をするときにも、束髪で濟んで居た、且つ束髪は手軽く經濟的の髪であつたのに、國産奨勵だからと云つて、態々髮迄、昔のやうにしようとするのは、大なる誤解かと思ひます。こんなことも、家庭の内では、母親が能く注意せねばなるまいと思ひます。

上流婦人の手内職と質素勤勉

今日は教育が盛で、中等以上の家庭の婦人は、大抵女子の高等普通教育を受けた方でありませうが、此等の人は、果して如何考へますか、外國貿易に於て輸出が、超過する位にせねばなりません。婦人の手で、外國へ輸出の途も計らねばなるまいと思ひます。お名前は申し上げませんが、今日の高貴の奥方の中にも、紹差繪

其の他美しい、技に上達して居らるゝ方もあります。一體上流の婦人には、時間に餘裕のある方が多いのでありますから、どうぞ、高尚なる、又實益に富む美術其の他の手内職をなされては、如何と存じます。外國では、皇后陛下を始め、貴婦人の手内職は盛なものであるさうであります。手内職をすることは、經濟上、國家の利益になる許りでなく、日本貴婦人の大缺點である金錢の有難味を知らすことが、自然の中に出來ます。遣ふときには、一圓や二圓は譯もないが、儲けるには、一圓の手内職は、さう容易く出來ません。食事が済んで雑談に少からぬ時間を費すとき、ぼんやりして居るとき、餘計な談話を交へて居るときを割いて、手内職を奨励したならば、國家の經濟にもなり、自然儉約を勵行することともなります。今日、質素儉約と勤勞とは、何より貴いのですが、戰勝後は、動もすれば國民却つて勤勞を厭ひ虚榮を欲することは、日露戰爭に徴しても明瞭であります。勤儉は、何時の世にも大切でありますから、どうぞ終始一貫して、質素を守り、勤勞をして行きたいものであります。

であります。

勤勞是れ國利民福

私共が彼此云ふに及びますまいが、政治界なども黨派とか個人とかに重きを置いて、國家と云ふものを次にして居は、すまいかと思はれます。日本人は忠君愛國の精神に於て、世界に冠たりと申しますが、近來或は大に之が薄らぎはせぬかと思はれます。これも一つには、歐米の個人主義とやらを模倣した爲かとも思はれますが、併し歐米人は、却つて愛國の情に富んで居るやうであります。我が國には、徴兵忌避の人があるさうでありますが、そんなことでは、國家の前途が思遣られます。でも今日迄戰爭に強いのは、何よりであります。けれども貧國であつては、致し方がありません。心ならずも外國に對して、割の悪い仕儀を蒙ることは、之が爲かと思はれます。富國となるには、一面實業を盛にし、大に勤儉の風を盛にせねばなりません。第一外債をなくせねばなりません。此の外債をなくすることは、三千萬の婦

人が心を同じうし、力を協せて、一層經濟を巧にしたら、譯はあるまいかと思はれます。今日の婦人は動もすれば、芝居とか寄席とかに行くのを、何よりの楽しみとするやうであります。勤勞を事とすれば、それが最も楽しくなり、他の快樂を要求しないやうになります。婦人は子を育つたり、經濟を計つたりすることを、無上の快樂とし、眞面目に働きたいものであります。(大正三年)

昔の女と今の新らしい女

維新當時の江戸風俗

私が初めて上京致しましたのは、明治三年でありました。其の頃の世の中は、丁度維新創業の際で、徳川時代の文明は、舊弊と云つて排斥され、西洋の新らしい文化が、どんぐり入つて來ると云ふ時でした。過渡の時代に、社會の風俗が亂れると

云ふのは、何時も普通の事でありましたが、此の時も、矢張其の例には洩れませんでした。今まで江戸には、各大名の家族が住んで居りましたので、一般の士民の女子どもも、自然その奥方や姫様達などの、美しい上品な風俗を見習つて、町家の内儀でも娘子供でも、幾分上品なつくりでございました。けれども御維新當時は、皆其の領地へ引き籠りまして、江戸に止つて居るものは、僅に旗本位のものでしたから、江戸の風俗と云ふものは、全く町方の風俗に化して仕舞ひました。

當時の若婦人の服装

それで二十歳前後の若い女でも、衣服と云へば眞黒なものばかり、薩摩緋でも着れば此の上もない上等の積りで、どんな處へでも、立派に出ると云ふ調子でした。芝居などのやうな華やかな場處へ行つて見てさへ、何處も彼處も眞黒で、變つた色は少しもありませんでした。女の子なども、お稚子などを結ふものは、更になくなり、おたばこぼんと云ふ髪に、紫の片でもかける位が關の山、矢張黒つばい地味

な衣服に、幅の狭い帯をきちんと小く、男結びに締めること云つた風で、立矢の字などは殆ど見た事もありません。それで皆眉を剃つて白粉をつけましたが、全で役者の子か藝人の子と云ふ風なつくりで、服装は男の兒と、更に變つた所はありません。こんなわけでしたから、一時は東京の町から、赤い布片や、友禪の美しい衣服は見られなくなりしました。

殺風景な時代

美術など、云ふものが、世間から捨て、顧られなくなつたのも此の時、風流とか趣味とか云ふやうな念は、殆ど一般の人の頭から、取り去られて仕舞ひました、それです。景色の好い丘などは、どん／＼取り壊して田にしたり、畑にしたり、庭に植ゑられた美しい櫻など、惜しげもなく引き抜いて、桑や茶を植ゑ付けると云ふ有様で、實に殺風景極つたものでした。此等は皆西洋にかぶれて、人の心が物質一方に傾いた結果なのですが、併し其の中の半分は、矢張保守的人でした。何事

にも中庸を得ると云ふ事は、むづかしいものと見えて、保守的人は、飽くまで昔風の頑固ですし、新しい人は極端にまで、新しい方へ進むと云ふ有様で、中々調和は得られなかつたのです。

當時の新しい女

其の頃も矢張、新しい女はあつたので、西洋に心酔した結果、いろ／＼と突飛な真似をしたり、男か女か分らぬやうな風をするものも、随分あつたのです。さう云ふ人達は、人並に髪など結ぶのは新らしくないと云ふので、大抵散髪でした。そして紺緋などの着物に、袴を着けたり、着けなかつたり、足には靴を穿きました。頗る妙な風でしたが、其の上に未だわざと風呂敷にも包まない洋書を抱へて、耳にも鉛筆を一寸挟んで、言ふ事はそつくり西洋の真似で、少しも女らしい所はありません。それからまだ舞踏とまでは進みませんでしたか、盛に詩を吟じたり、劍舞をしたりなごしたのです。何時でも世の中の移り變る時には、妙な風俗が出来たり、

變な人が出たりするもので、大正の維新に、妙な新しい女が出たのなども、別に不思議な事はありません。勿論時世が違ひ、文明の程度が違ひますから、思想などは非常に變つて居りますが、要するに今日云ふ新しい女に、外ならなかつたのです

眞の女の道

大正維新の際に出来た、新しい女の事は、皆さん御承知の通りですが、明治維新の時分にも、矢張こんな新しい女は、良家の娘様や、眞面目な人達からは爪はじきされて、一種の變り物として扱はれて居りました。それでも本人は、大の得意で居つたのですから、さう云ふ點などは、大分大正の新しい女と似て居ました。今日では新しい女に對する世間の批評も、略定りましたので、若い女達が、進んで行く方向に迷ふと云ふ事は、先づないと思ひますが、前にも申した通り、何時でも世の中の一變りする際には、常道を外れた男や、女が出るものです。併しそれは、決して社會から一步進んだ者でもなく、一船の若い女を指導して行くと云ふものでも

ない、と云ふ事を忘れてはなりません。固より世の中が、一日一日と進んで行くのに女ばかりが、昔のまゝで居つたら困ります。無論時勢に伴れて、日々に進み、新らしくならねばならないのですが、新しいと云ふのは、たゞ變つた風をしたり、自分勝手な眞似をするると云ふことではありません。昔の女は、何も譯は知らないでたゞ女は夫に背かぬやう、親には順ふものと云うて教育されましたので、所謂盲從的に屈從したのですが、今日の新しい教育を受けた女は、一步進んで、何故に親や夫には従ふのかと云ふ道理を知り、是非善惡を辨へて、其の上で親は親、夫は夫として、何處迄も尊敬を拂ひ、從順に仕へて、一家の和ぎとなると云ふのでなくはなりません。是れが本當の新しい女で、世の進むに伴れ、社會道德なども變つて來しても、女性の天職が主として家庭にあるとか、妻が夫に順ふと云ふ事は、決して變つて行く事はないのであります。

新らしい女を評す

新らしい女は流行病

近來新しい女どか云ふものが流行するので、大分婦人問題が八釜しいやうですが、私などは、てんで齒牙に掛けない方でありませう。日本人の思想精神が、乍らついて居る今日では、こんな問題は起り勝ちの者ですが、併し一時の流行に過ぎない。まあ流行病ですから、いづれ健康が回復すれば、熱に胃された女達も、其の中には本心に立ち復るのでせう。利いた風な事は申しても、其の實際を見ましたら、本氣の沙汰ではありません、何といふ淺猿しい事せう。

西洋思想と日本魂

我國には、何千年來押しも押されもせぬ日本魂と云ふものがあります。日本人は男女に拘はらず、此の魂を確乎させて置いて、種々のことに迷つてはいけません

併し、佛敎の入つて來た時の印度ハイカラも、儒敎の持囃された時の支那ハイカラも、ちつと大觀すれば、一時の流行に過ぎなかつた。近頃の西洋ハイカラの思潮でも其の通りで、やれ珍らしいの、新しいの、奇抜だのと言ふ内が花で、元來女でも男でも、そんな人等の言ふ様な事が、始終通せる者ではない。自分に都合の宜い我儘ばかり言つた所で、世間が許さぬ。大和魂が承知せぬ、人間の本分、婦人の本領が立たぬ譯で、天地自然の道理に悖つた事でありませう。

夫唱婦隨は自然也

そんな人達は我が國の國體を、何と思つて居るのでせう。西洋風に感染れて、女だてらに男女同權だの、婦人の獨立だのと騒ぎ廻るが、其の實は不品行や墮落の結果人が相手にせぬから、嫉氣になつて、氣狂ぢみた眞似をするに過ぎない、昔から死んで夫を諫めた女は、貞女とされて居れど、夫が氣に喰はぬと云ふ我儘から、子供迄ある間を離縁だの、何のと云ふ忌まはしい事柄を平氣で遣つて、それで「新し

い女」もあきれられるではありませんか。此間英國の婦人で、マリソンといふ人が訪ねて来て、日本婦人を代表してのお話がお聞きしたいと申します。仍て私は我邦の御國體から、種々説いて聞かせて、日本の婦人は斯ういふものだと話した所が、兩方の手でその眞似をして申すには、米國では夫婦が歩くに、婦人が先に立つて夫が随うし英國では夫婦が並んで歩く、日本では夫が先に立つて婦人が随ふ。此の内では何れが一番宜からうと尋ねますから、私は勿論日本の風が一番宜い。それが天地自然の道理に適つて居ると申してやりました。女が夫と並んで歩くのでさへ宜しくないのに夫より先に立つて歩くに至つては、沙汰の限りであります。

貞淑は必ず夫を感せしむ

それは男より豪い女もありません。又是迄は、男が我儘で無理であつた事もありませう。だど云つて、女が道に外れた事をして、男に楯をつくると云ふのは、益々社會の秩序を破るばかりで、何の益もない事であります。女が其の美德を守つて、温順

貞淑であつたならば、如何に暴慢無耻な男でも、必ず其の非を悟つて、優しい夫となり、慈愛に富んだ父となりませう。社會組織は外から、如何に形式を變造しても立派になるものではありません。必ず内から漸次に改善して行くことが、肝要であります。今日自墮落な新しい女達が、三五人寄つて、やれ社會組織が何うの、婦人權がどうの、などと申した處で、世間では初めの程は、愛嬌者位に思ふが、段々憎悪を増す計りで、改善どころか、社會の外に放逐されて、一生を自暴自棄に終ると云ふ、悲惨な羽目に立至ることは、火を観るより明かな事であります。男は何うであらうと、女は先づ何時迄も女らしく、婦徳を磨いて、徳の力で、無理な夫をも立派にし、進んでは、御國の爲になる事を心懸けねばなりません。

若婦人に注意

初めにも申した通り、現代婦人界の問題となつて居る、新しい女などに就いては私は全く齒牙に掛けて居りませぬ。けれども、うら若い女が、何事にも、新しい事

や、珍らしい事には、迷い易い若い女達が、此の流行熱に冒されて、一生を自墮落な境遇に陥れ、可憐人生を我から悲惨の中に沈淪して、父母を泣かせ、家名を汚し、親戚故舊に爪弾きせられる様になり行くやうな事があつては、誠に容易ならぬ事でありますから、若い婦人自身は勿論世の父母たるもの、女子教育に當る人達は、注意の上にも注意して、災禍を、未前に防ぐやうに努めなければならぬ事でありませぬ。

理想の御女性

私共の此上なき光榮

昭憲皇太后陛下、御坤徳の高くおはし、ことは、今更改めて申し上げる迄もありませんが、私は明治三年に上京し、同じく五年十月、先帝并に時の皇后陛下、即ち昭憲皇太后様に拜謁の光榮を賜はりし以來、屢々御揮毫やら、御講義やら申上げたことがございました。固より身分卑き私共のことでありませぬから、さうお親しきお拜

謁などは出来ませんが、自ら美術に親み、女子教育を掌ることゝて、前述のやうに、お側近く出で、お言葉を頂くことが出来、それに今の閑院宮妃殿下、時の三條様の御姫様は、お六歳のときから、御預り申したる縁故を以て、後年女王殿下をも御教育申し、又一條様の御姫様をも教育申しまして、此等の方と、御前に待つたことは、屢々ありました。

我が女學校への思召

皇太后様には、夙に女子教育に御心を傾けさせられ、私共の女學校には、始終有り難き御懇命を承りました。明治八年の頃、我國の女學校と云へば、僅に私の女學校と竹橋女學校位で、此の時皇太后様には行啓遊され、竹橋女學校即ち今の女子高等師範學校の生徒が、髪を唐人髪に結び、紺と藍色との馬乗袴を穿いて居るのを御覽せられ、日本には、昔から女の袴がある、花蹊の學校のは、緋の袴仕立にして、紫の袴を用ゐよとの御懇命がありましたので、爾來私の女學校では、紫の

袴を用ゐて居ります。此の様に、私の女學校は、陛下の御懇命を頂いた學校ではありませんが、獨力のことで、さう設備も十分に參らず、一回も行啓を奏請したことはありません。植物園などに行啓の砌、門内迄御馬車を駐め賜ひしことが、あつた丈でありました。

御言葉に出し給はず

皇太后様の御坤徳に就いて、私共の親しく拜し奉る所に依つても、其の貞淑、仁愛、謙遜、廣量、文雅、沈勇其他の諸徳を具へ給ふことは分りますが、陛下には何事も御言葉に出し給はないで、自然に事を成される方で、實に一般婦人の倣ふことの出來ぬ御徳を具へて居らせられた。古今東西に類を絶した明治天皇の鴻業を内助し給ひしことは、申すも恐れ多いことであります。

人を視給ふこと明也

皇太后様には、國學、漢學に通曉遊ばされ、百般のことを知ろし召し給へるも、

極めて謙遜にましく、物知り顔などは、毫もなさせ給はず、明治天皇様に事へて貞、英照皇太后様に仕へて孝、東宮殿下を始め御教養なまつて慈、博く國民に對して慈善同情の御心を盡し給ふが中にも、宮廷にては、あの仰山の女官を御監督遊ばして、毫も不平の聲を出さしめ給はず、殊に明治天皇様と共に、人を見るの明に富ませ給ひ、器に隨つて人を使ふの途を、誤らせ給はなかつたと承ります。

正直を好ませ給ふ

而して多くの女官などに對して、毫も依姑の沙汰などなされず、假ひ過失ありども、正直に白狀して罪を待つものをば、少しも咎め給はず、自然に御徳を以て化し給ふ有様でありました。唯故意に過失を蔽ひ、お上の明を晦さんとする如き人があること、明治天皇様よりお暇が出たと云ふことであります。

行幸の折の御心配

皇太后様の明治天皇様を視給ふこと、天に對せらるゝが如く、殊に行幸などある

ときは、衷心に其の御無事を祈り奉らせて、一切の娛樂を排け、安眠だもし給はぬと承りました。彼の日清戦争で、廣島行幸中の如きは、特に日夜御安否を御氣遣になつたと承ります。彼の社會主義など云ふ狂亂の徒が出でしを聞き給ひては益々お胸を安くせられなかつたと承ります。私共の如きものも、行幸啓のときは竊に御無事を天神地祇に祈り奉つたのでありますが、幸に、彼の忌はしき社會主義の如きは、一時跡を絶ちましたやうなもの、果して其の根絶したりや否や、實に疑問に屬し、恐れても恐るべきことであります。

御痛心の儘崩じ給ふ

陛下には、政治上のことには、一切容喩なさらぬこととなつて居りますが、國家の上のことには、斷えず御意を注がせ給ひ、何かむづかしいことでもあると、非常に御心配に相成り、御寢食にも影響させ給ふ位であります。大正に入りて政局混亂の際は申す迄もなく、彼の海軍收賄事件起りて、耻を海外に暴さね

ばならぬことを見そなはし、又後繼内閣の容易に成立たぬを聞召しては、どの位御心を痛めさせ給ひしか、分りますまいと拜察仕ります。されど後繼内閣も出來上り、收賄事件も解決した後迄、御生存遊ばしたら、どの位お喜びになつたか分りまします。其れを見給はで、俄に御登遐在らせ給ひしとは、實に恐懼に堪へませんのであります。私共は天に哭し、地に働して敬悼致しました。

皇太后の宮の御盛徳を菊によせて乞はれければ

色に香に仰ぐもかしこかげたかき

あきのみやまのしらさくの花

嗚呼女王殿下

賢明なる季子殿下

亡くなられた閑院宮季子女王殿下は、誠に御伶俐な御方で、御學業も非常に好く

御出来になりました。兎角世間では、末子と云ふと親御も甘し、常人も我儘を申し殊に物事が、少し能く出来でもすると、姉様其處退けと云ふ様な振舞をするもので御座いますが、季子女王殿下に限つては、決してさう云ふことはございませんでした。御二人の御姉宮殿下に對しては、能く長幼の序を辨へられ、決して差出がましいことなどをなされたことはございませぬ。御學友に對しても御深切、召使の者に對しては、御同情があまりになつて、御無理などを仰しやつたことがなく、御自分で出来る事は、ずん／＼御自分でなされて、そして御身装なども、極質素で居らせられました。一口に申しますと、何から何迄、能く行届いたお方で、あゝ云ふ方が生きて御出でになると、世間の人の模範になる様な方に、おなりであつたらうと思はれますのに、遂う／＼お薨れになつたのは、お教へ申上げた私共も、尠らず落膽して居る次第でござります。

遠足がお樂しみ

季子女王殿下は、平素は決してお弱い方ではなく、至極御健康でいらつしやいました。昨年七月御病氣にならるゝ迄は、一遍も御病みになつたことはございませぬ。御病氣になつてからは、醫者から學問も運動も、一切禁じられたので、毎日御邸で何もなさらずに、机の前にならんとお坐りになつて計り、お出でになりましたが、學校にいらつしやる頃は、運動も中々御活潑に遊ばされ、殊に春秋の遠足は、何よりの御樂みで、私共と多摩川へ遠足にいらした時なども、御自分で川の中へお入りなご遊ばされました。平素は上の御姉様の恭子殿下の方が、ずつとお弱くいらつしやいました。

御學業は何れも御得意

跡見女學校へ御通ひになつたのは、七つの御歳からで、尋常科の内は三人の御學友と、別室でお教へ申上げました。御學友と云ふのは、工學博士斯波忠三郎氏長女輝子、全權大使秋月左都夫氏三女キク子、杉田與兵衛氏二女滿壽子の三令嬢で、此

の内杉田さんの令嬢は、明治三十年生、他は皆殿下と御同年で、三十一年生でございます。御學友に對して、深切丁寧でいらした事などは、お蔭れになつた當時、新聞などに見えて居りました。それから高等部になられてからは、最う他の五六十名の生徒と御一緒に、授業を御受けになりました。あゝ云ふ御伶俐なお方でしたから、別に、どの學科が御得意と云ふことはありません。何から何迄好くお出来になりました。數學なども、中々御堪能で在らせられました。

跡見女學校をお退きになつたのが一昨年で、それからは各科の教師を自邸にお招きになつて、活花、琴、其の他をお習ひになつて居られました。私の處へも、御姉様お二人と、一週一度宛お出でになりました。繪のお稽古をなさいましたが、繪も立派にお描きになり、字なども中々お達者でございました。

悲しみの極み

御病氣は昨年七月からで御座いますが、その後さしたる御變りもない様に承はつ

て居りました處、今年七月一日に御悪いと云ふ御電話で、早速御見舞ひに上りました様な譯で、それから次第に御病氣が募り、朝お見舞ひに上つた時には大したこともない様で引退りますと、午後には又お悪いと云ふお知らせで、又參邸すると云ふ有様、一日に二度も御邸に上つたことが度々ございました。そして私も心から、御快癒の程を御祈り申上げて居りましたが、その甲斐もなく、遂に敢なくおなり遊ばしましたのは、眞に誠に悼んでも、尙餘りあることで御座います。(大正三年九月)

乃木將軍夫妻を偲ぶ

乃木將軍夫妻の自殺

私共、明治天皇御大葬の當日には、閑院宮邸で奉送し、畏くも、宮殿下の仰置もあつて、當夜は、宮邸にお泊り申しました。翌朝未だ夜も明けぬのに、邸外には頻りに號外號外の聲囂しく、頓て乃木大將夫妻自殺の報が傳りました。私は吃驚致し

まして、ごうして大將夫妻は自殺されたであらう。恐れ多くも陛下の御信任厚く軍事参議官及び學習院長の榮職に在り、殊に學習院にては、皇族方及び皇室の藩屏たる華胄の子弟を預り、之を十分に薰陶すべき大責任を有し乍ら、又、貴賓コンノト殿下接伴の主任を仰付けられ乍ら、自殺なさるとは、餘りではあるまいか、其れでは殉死をなさつたからと云つても、彼の世の陛下は能く來たと、お喜び遊ばすことはあるまいと、一寸胸中に浮びましたものの、いや／＼乃木大將でもある人だから、さう輕々しいことではあるまいと、思返して居る中、大將夫妻の自殺の理由は種々に新聞で發表され、殊に大將の遺書を見るに、明治十年の役に、聯隊旗を奪はれたることが、最大原因となり、爾來死所を求められて居り、明治三十七八年戦役後、陛下に對し奉り、旅順で多くの將卒を殺しましたのは、何共恐れ入る次第でござりますから、死してお詫を致しませうと申されたを、陛下のお言葉に依り、見合せられたと云ふことさへ分りましたから、曩に自分の判断したところ、輕卒にし

て、大將夫妻の自殺こそ、實に天晴、死所を得られた、何とも忠烈の至りであるとはど／＼敬服致しましたのでございます。大將の如き、崇高なる人格を有し、斯る境遇に接して自殺されたのであるから、單純に殉死されたのではない、實に其れ以上の死に方であると思ひます。夫人の自殺は、精神は同じくても、意味は異なり、良人に殉死せられたと申すべきであると思ひます。

乃木大將軍と教育事業

私共これに就いても感じますのは、常々女弟子を多く持つて居る身には、ごうぞ乃木さんのやうにしたい。乃木大將が、學習院長になられた當時は、私共初め世の中の人の思ふには、大將は、軍人としては、忠勇無比の方ではあるが、教育家としては如何であらう、軍人として、天晴の大功を樹てられたやうに、教育者にして、如何であらうなど、多少疑問を挾んで居つたのでありましたが、流石は乃木大將で、自分は學問がないが常識でゆくなご、仰しやつて居られたさうですが、事實は之に

反し、從來の多くの院長以上に、着々と教育事業に功勳を奏せられ、華胄に有り易き弊風を一洗し、益々教育上に盡されましたので、私共大に模範として居つた所でありました。儲道徳上のことが、國家教育の根柢とはなるものの、眞に徳育を施すことは、非常にむづかしい、世に言説上の教育家はあつても、實行的の教育家は少い、動もすれば理論に流れて、精神内容を疎にせんとする今日に際し、大將の如き人のあるのは、何共心強い至りでありました。私共は、日本國民の教育としては祖先を大切にすると云ふことが、何より大切である。畏くも聖上陛下には、何時も皇祖皇宗の遺訓であると仰しやつてござりますが、吾々臣民も等しく、祖先の遺風を顯はさねばならぬ。日本魂と云ふことは、要するに之を基本とするものであらうと信じます。外國のことに、幾多の長所がありますが、日本魂が疎になつて居るやうでは、折角の學問も知識も、御國の爲にならないで、却つて害をすると云ふ有様となつて来る。假ひ學士とか博士とか、肩書のある人の中にも、外國かぶれの人

の少からぬ世に、大將の如き人の現存されたのは、實に何とも心強く、活きた模範的人であつたのであります。

乃木夫人の死と今日の婦人

其れから夫人のごとでござりますが、夫人は、さつぱり外出なされない方であつた。而も家庭のことに奮闘努力し、且つ非常に謙遜で、言葉寡い方でありましたから、貴婦人仲間でも、頓と其の詳細なることを知る人はいやうでしたが、穿鑿すれば、逸話は幾らもあり、日本婦人の模範とすべき點の多くあつた方に相違ありません。熟く人々の言ふ所、新聞の記する所に依るに、夫人の如く淑良、貞順、仁勇にして、殊に忍耐強く同情に富んだ方はあるまいと思ひます。此の如き夫人にして、良人に殉死されたることは、實に其の至情より出でた、至當のごとであります。婦人としては、誰方も乃木夫人の如くありたいものです。但し、之を考へ違へて、精神を學ばないで、自殺を學んで、其れこそ大變であります。多くの場合に於て、良

人に殉死すると云ふことは、面白からぬことであります。普通の家で良人が亡くなつたら、子供もあれば、繫累もある、家政治上の種々のことがある、良人が亡くなつたら、却て、良人存生の時よりか、一層氣を確かにし、身體を大切にしつつ、子供を一人前にし、家政を齊へ、一家萬年の計を立てねばならぬのであります。其れを良人が死んだからと云つて、徒に死を急ぐなご、云ふのは、實にけしからぬことであります。近來は、一般士女の意志が、昔日の如くでなく、思へる男に添はれぬ負債に困る、喰べられぬ、嫉妬に堪へぬなどで、自殺とか、情死するのは、最も悪いことで、戒むべきことであります。殊に今日の婦人には、勇氣、忍耐の精神を盛にせねばなりません。乃木夫人の自殺は、其の意義に於て、普通の自殺と大に反し却て最も勇氣あり忍耐強い方で、殊に親なく、子なく、良人なく、一家は斷絶に決し少しも思ひ残す事はないので、良人に殉死されたのであるから、實に至當のことであります。世の中の婦人は、此に於て一點の誤解なからんことを希望致します。

貞順の美風を保存したし

儲我が國の美風たる、一度嫁したら、二度と嫁しないと云ふことは、何處迄も保存すべきのに、今日此の美風の消磨しつつあるのは、慨かほしい至りであります。されば、結婚して離婚を、左程苦にしないものがあります。誘惑に抵抗することの出来ぬ人があります。學問して節操を輕んずる人があります。此の如くにして、已まなかつたならば、實に國の前途も思遣られるのであります。申す迄もなく、妻として夫に隨ふのは、當然であります。乃木將軍の如き職務、乃木將軍の如き性質の方であつて、夫人に對して、お前は家庭のことに専心一意なれと仰しやつて、其の外出を喜ばれなかつたのであるから、夫人は、其の通りなされたのであります。斯くしてこそ、初めて夫婦の眞意義があらうと思ひます。されど、若し良人にして、乃木大將の如き性質でなく、職務でなく、境遇でないのに、其の妻は徒に乃木夫人の眞似、良人が外に出で、働くことをも欲するのに、強て内丈を守り、事情、自ら

乃木夫人と反するのに、形丈乃木夫人を眞似するのはいけません。其の精神に立入つて、何處迄も己が良人に殉せられんことを切望します。私は婦徳を保ち、婦行をなすにも矢張、祖先崇拜の念より出發することが、肝要であると信じます。何事も、先祖に對して面目ない、先祖の家名を揚げんと思へば、惡を去り、善を取ることが出来ようと思ひます。

乃木將軍の忠烈をたへへて

かくり世にありても君のみまへまで

御國のさかえまもりますらむ

乃木夫人のみさをたへて

もみちはの秋の血しほを身にそめて

こゝろのにしき織りいてにけり

御大禮後の婦人

御大禮が革新の機

今度行はせらるゝ御大典は、陛下御一代に一度行はせ給ふものでありますから、國民としては、特に謹み歡び奉つて、此の大典を祝すべきであります。奉祝の方法は、稍々新年に似通つて、而も大に鄭重になすべきことであります。其等のことは世間の名士方が、殆ど説き盡したやうでありますから、私共が兎や角言ふ必要はありません。唯日本婦人は、此の最もお芽出たい御大典を機として、如何に行爲を革新すべきかを、一言したいと思ひます。それは毎度申す通り、婦人は家を齊へると云ふ責任がありますから、萬事、家を齊へることを標準として、或は言ひ、行ひたいものであります。此の心得が十分に出來て居たら、婦人界の通弊たる虚榮虚飾とか、骨惜み不眞面目とか、我儘勝手とか、惰弱淫逸とか、嫉妬反目とか云ふ

ことは、影を断たうと存じます。

一層の努力を要す

申す迄もなく今日は、世界に大戰亂があつて、最も強猛なる獨逸が、我が敵國となつて居ります。此の時に方つて、國民の半數を占めて居る婦人は、封建時代のやうな考へを持つて居てはなりません。どうぞ此の御大典と共に、精神を革新し、内助に、育兒に、經濟に、勤勞に、慈善に、一層の努力をして、眞に大正の日本婦人たらんやう、致したいものであります。古語に身修つて家齊ひ、家齊つて國治り、國治つて天下平かなりと、婦人の家を齊ふることは、即ち國家を治め、世界を平和にする所以と存じますから、女性たる者は、此の心得で萬事に注意し、日に新に、日に新に、向上進歩したいと存じます。所感のまゝ、一言老婆心を披瀝しました。

世界の大戦と日本婦人

世界の大戦と學校家庭

日本も世界の大戰爭に加はり、國民の憤勵、婦人の努力を要しますことは、申すに及びません。我が校の生徒に對しても、自己の義務責任、悉く申含めて居りますし、生徒も其等を、凡そ心得て居て私共の訓へを守る事に、非常に忠實でございませす。夫れ故夥しい外債のある事位は、學校に籍を置いて居る程の者は、疾に知つて居て、各自の上に其の負ひ目のある事を感じて居ます。併し、之を實行する上に於て、まだ遺憾な節が往々見られます。殊に其の實行の上に、家庭の教育と學校の言ふ所と一致しない事を、屢々見て、誠に残念なことだと思ひます。

獨逸の強い理由

今度の大亂に由て、私共が多く受けた教訓の中で、最も卑近な事で、而も必要な事は、獨逸の強いことでもあります。日本は確に強い、獨逸が十餘年青島經營の爲に、莫大の財を費して備へた兵備も、物の美事に陥れたと云ふのは、近年誇るに足る

事實のやうですけれども、獨逸があの大きな歐洲の野戦に、強い列國を敵に控へて猶勇敢に戦ひ續けられると云ふのは、外ではありません、富であります、財力であります。之れが爲に、確乎とした覺悟も出來ます。夫れに比べて日本は、如何でせう、國民は富國強兵と言ひますけれど、決して富國ではありません。六千萬の國民があるとして、其の三千萬は我々婦人です。其の三千萬の婦人が、皆其の責任を盡して居ませうか、惟ふに國民の其の半數が、本氣になつて眞面目に立つた時に、國債も何も、何うにかなるものではありませんか、内職は耻辱だといふ今日の人は、中忙しくて、迎も内職どころではないと云ひます。其の忙しさと云ふのは、何をし忙しいかと云へば、身粧や無駄話に、時を費す人が少くありません。

勤儉力行を尙ぶ

獨逸の強い所、富む所は、國民舉つて勤儉力行して居る爲です。婦人も一生懸命です。そして大敵を目の前に於いて、戦争が出来るといふ自信が出來たのであります。

それを思へば今から母となる人に、熟く考へて貰つて、何か無用の物に財を費す事のない様、更に言へば殖産の道を作られる様にしたと思ひます。柔弱な男を見ると情ない、男に向つては言ひたいことも、澤山ありますけれど、先づ女に三千萬の女に、自ら省みて貰ひたいと願ひます。

餘計のものは廢したし

私は學校の生徒に、目に立つ色の衣服を廢させやうと努めて居ります。夏の暑い盛り、蟬の羽の様な襟巻を、外見に用ゐる愚を説いて、序に冬の最中にも、決して袷巻を用ゐない事にしました。髪結び方で、頭巾も廢したのを見れば、頸の廻りを包まずとも濟むと思ひます。伊達に此頃の人が、綿入を着ない處を見ても、寒さは凌がれるものと信じます。斯う色々考へて來ますと、多くの人は、無くてがなの事に、餘計な財を費してゐることに思ひ當ります。畏れ多いが、私が御教授申上げる閑院宮の姫宮様方が長いお喪中に、黒のメリンスの召物、綿入、お單衣、お袷と三組

きりで、決して他の物を欲しさうにもなさいません。夫れを拜しても、さう餘裕のない者などが、着飾るといふ様な事は、慎む可き事でございます。

國運の發展に添ひたし

利己的の現代と私の喜悅

近來は、人々の利己心が強くなつて、忍耐とか克己とか云ふ美德が行はれず、長上も恩人もない、父母も教師もない、主人も上役もない、各自の榮達利益さへ計れば宜いと云ふやうになりまして、早い話が、學校の方面に於ても、生徒は先生を雇人視して、學校でも離れたら、路に會つてもお辭儀もしないと云ふ位になり、甚だしきは在校中、先生の放逐運動をするに云ふことになりました。此の風が改まらねば、忠君愛國孝悌慈善も、何もあつたものではありません。幸ひ私の學校に於きましては、生徒は先生を敬ひ、不肖の校長も、一同尊敬景慕して呉れまして、本年

の七十七の祝には、門人達相計つて、盛大なる祝賀會を催し、殊に來る五月九日十日十一日の三日間には、バザーを開いて、其の収益は、一切私に呈するとのことでありませんが、私は學校の基本金にしたいと思つて居ります。バザーの品物は、京都の清水焼萬珠堂の特色に成れる漆器并に陶器に、私の落款ある種々の繪畫を描いたもので、之を入场券あるものに賣ります。其他生徒の描いた團扇などを出す筈です。私は澆季の世の中に、斯くも手厚く志深き祝賀をして呉れるかと思へば、喜悅に堪へないのであります。

世界統一の機運と國民の現狀

熟々思ひますに、我が國は有り難いことには、次第に世界を統一する機運に向ひつゝあるやうに思はれます。明治維新以來、種々なる事變がありましたけれども、何れも之が機運を促し、特に日清戦争、北清事變、日露戦争を経て、益々國運を發展し、近く獨逸を山東并に南洋に屈し、英國と同盟し、佛米と協商し、支那を導き

露西亞を助け、其の他列國と親み、將に覇を唱へんとしつゝ、あります。此の機運は、畏くも皇祖皇宗の造らせ給ふ所であつても、國民の大に踴躍奮起忠實努力せねばならぬ所でありませう。所が、それ所か、國民には未だ、放逸惰弱の者の多いのは、女ながら憂慮に堪へない次第であります。

肉食は亡國の食物也

斯る機運を有する國民は、體格が最も強健であるべき筈であるのに、事實は之に反して、壯丁の如きは、年々歳々弱小になりつゝ、あります。實に慨歎の極であります。其れは何故でありませう。精神物質各方面に於て、種々なる原因がありませうが、一つは食物の爲であらうと思ひます。日本人は、二千五百年來喰べて來た、五穀野菜の類を卑んで、牛乳とか肉類を、最も衛生に宜しいものとし、子供の如きにも、牛乳を吞ませねばならぬものとした。牛乳を吞むと、一寸肥るけれども、身體を弱めて長壽がむづかしい。子供などもぶく／＼肥る丈で、直ぐ病氣に冒され易

い。大人も肉食を多くする爲に、腎臟炎とか、何とか、いろ／＼の病氣を起して、夭死するものが多い。其れは肉類は血をねばくし、不淨にするからださうです。之に反して菜食は血を清め、血の循環を好くするさうであります。牛乳より粥とか重湯とかが宜しく、日本のやうな温帯な、清和な、米穀の生ずる國では、矢張、祖宗以來精選淘汰し來つた、植物性の食物が宜しいやうであります。其の他、身體を強壯にするには、運動も宜しく、入浴も宜しく、静座深呼吸も宜しく、願はくは國民擧つて、強壯健康の身體になりたいものであります。

獨逸の強さ我が國の現状

諸目下世界は大戦亂なり、我が國の責務は、益々加はつて來ます。所が獨逸國は敵ながら天晴なる腕前であります。政治、法律、海陸軍、教育、學術、農商、工藝一として、後れを取るものはない、而も國民は男女老少階級職業の區別なく、力を協へ心を一にして、國事を成し、最近には、世界の列強を相手にして、びくともし

ないのみか、却て敵國に侵入して居る有様は、聯合國の最も恥しいことであります。斯る強敵を控へながら、國運發展の折柄、日本の議員の現状は如何でせう。黨派あるを知つて、國家あるを知らないかのやうで、反對黨のこと、云へば、何でもないことをも、八釜しく云ひ、自黨のこと、云へば、如何なる悪事失策も辯護し、而して、私生活に於て、甚だ不清潔である、酒を飲み、色を漁り、是れ利是れ征ると云ふ有様では、實に寒心に堪へませぬ。我が教育界に於きましても、師を尊び、徳を崇むるなどのことは殆どなく、況して天を畏れ、神を敬ふなどのことは、非常に廢れました。されど神國の嬉しさは、近來各方面に於て、幾分覺醒の曙光の認められるは、極めて慶すべきことであります。幾ら外交が下手であると云つても、露西亞に對すること、支那に對すること、米國に對することも、自然に都合好くなつて參りますし、外國より軍需品其他の註文もあつて、多年困つた輸入超過のこと、舶來品使用のことも、自ら防止することが出来ましたし、不幸を轉じて幸としようと

して居ります。されば此の機運に際して、萬事を革新改良すべく、忠實勤儉にして禮儀廉耻を尙び、最も婦人の職責に於て、育兒、經濟、内助のことに於て、嚴格にして行届いた方法を執りたいものであります。

折にふれたる

花 蹊

かゝる時いよくあらはれいでぬべし

神代なからの大和たましひ

終

昭和十六年一月二十五日印刷
昭和十六年一月三十日發行

停 定價金九拾錢

編輯兼
發行者 小泉準 一

印刷者 西村由太郎

印刷所 西村印刷工場

東京市神田區猿樂町二(錦華通)
發行元 合資 內外出版社
振替東京九四六四七番

最新法律受驗叢書

憲法問題考試提要

三五判洋綴二〇〇頁 送八錢

行政法問題考試提要

三五判洋綴一八〇頁 送八錢

警察法問題考試提要

三五判洋綴三五〇頁 送八錢

憲法及行政法提要

三五判上製三五〇頁 一圓五十錢送十二錢

警察法規提要

三五判上製三八〇頁 一圓五十錢送十二錢

民法、民訴、刑法、刑訴、商法、會社法其他順次續刊の豫定にて目下原稿進行中

本叢書は桑田博士の監修に成り、普通試験を初め各種の特別任用試験を受けんとする人々に對し正確なる教科書として、指導啓發の資料に供すると共に、一面また實務家に取つて忠實なる相談役である。

内容豊富、文章は口述を用ひて平易簡明、各種試験問題を蒐集網羅して餘す所なし、尙卷末には數十頁の問一答を掲げ初學者にも一讀直に理解が出来るやうに便してある。

全 國 書 店 發 賣

直接 本社 へ御 注文 の際 には 振替 利用 下さい

最新新書翰文叢書

文學士 加藤清司著

女子慰問文讀本

四六判洋綴二百頁 六十八錢 送料八錢

慰問激勵文讀本

同上

女子書翰文讀本

同上

日用書翰文讀本

同上

軍人書翰文讀本

同上

軍事演說讀本

同上

實用手紙文讀本

同上

名家書翰文讀本

同上

高橋親城書 ペン手紙文讀本

同上

本叢書は加藤先生の執筆になれる戦時體制版として各方面から多大の歡迎を博して居ります。出征に、入營に、凱旋に、送迎に、慰問に、式辭に、挨拶に、演說に、其他書翰文のことなら、本書一冊さへあれば、何んでもわかるのが本叢書の特徴であります。何れも分賣致します。

全 國 書 店 發 賣

直接 本社 へ御 注文 の際 には 振替 利用 下さい

戰時書翰文叢書

文學士 篠原豊著	軍人手紙文 附 式辭挨拶演說	三五版上製三八〇頁 一圓廿錢 送料十二錢
	慰問手紙文 附 式辭挨拶演說	三五版上製三二〇頁 一圓廿錢 送料十二錢
	女子慰問文 附 式辭挨拶演說	同
	式辭挨拶演說 附 慰問激勵文	同
	慰問激勵文	三五版上製二〇〇頁 六十錢 送料十錢
	女子慰問文	同
	軍人手紙文	同
	式辭挨拶演說	同

本叢書は篠原先生の執筆になれる戦時體制版として各方面から多大の歡迎を博して居ります。出征に、入營に、凱旋に、送迎に、慰問に、式辭に、挨拶に、演說に、其他書翰文、演說式辭のことなら何んでもわかるのが本叢書の特色であります。何れも分賣致します。

全 國 書 店 發 賣

直接 本社 へ御 注文 の際 は振 替を 御利 用下 さい

劃期的大改正の新商法

辯護士 尾山萬次郎先生著	改正新商法精解 四六判 上製 五七〇頁 金三圓 送料三十錢
同	改正新商法書式精解 四六判 上製 五三〇頁 金三圓 送料廿四錢
同	改正新商法 四六判 洋綴 一七〇頁 金八十錢 送料八錢

（新商法の中には新會社法の條文が全部入つて居ります）

舊商法の六百餘條が一躍八百餘條に改正

▲改正新商法精解は大森民事局長十年苦心の結晶たる改正新商法を桑田博士監修の下に、一般國民に一讀直に判るやう新舊兩法を對照して解説した最新の著書である。

▲改正新商法書式精解は改正された新商法の條文により、參照條文付にて解説したのであるから専門家は素より一般商事關係家にとり必備の著書である。

全 國 書 店 發 賣

直接 本社 へ御 注文 の際 は振 替を 御利 用下 さい

現行法規書式叢書

辯護士 尾山萬次郎先生著

民事書式大全
四六判 上製 四三〇頁 金二圓半 送料二十四錢

商事書式大全
四六判 上製 三八〇頁 金二圓半 送料二十四錢

民事、刑訴、警察、兵事、
 恩給、地租、特許、訴願 書式大全
四六判 上製 三五〇頁 金二圓半 送料二十四錢

現行法規書式大全
四六判 上製 九〇〇頁 金三圓八十錢 送料三十錢

解説 附 現行法規書式總覽
四六判 上製 一千百頁 金四圓五十錢 送料三十錢

皇紀二千六百年一月元旦を期して改正商法の施行に伴ひ、改正會社法と夙に歐米に流行してゐる有限會社法が新規に出來たので、我國法規書類の改正は實に眼まぐるしいほどである。

本大全集は改正商法が去る第七十三議會通過と同時に執筆に着手、晝夜兼行の努力を以て茲に漸くその完成を見たのである。専門家はもとより實際家等に敢て一本を勸む。

全國書店發賣

直接 本社 へ御 注文 の際 は振 替を 御利 用下 さい

414
4

終

